

銀座煉瓦街で使われた煉瓦の特徴について
A Study on Characteristics of Bricks Used in Ginza Brick Town.

久保田 稔男
KUBOTA Toshio

1. はじめに

銀座煉瓦街は1872年の大火をきっかけに、防火と美観を目的として実施された日本最初の洋風街区計画である。建物は煉瓦を中心とした不燃材料で建設された。煉瓦の寸法は、設計を指導したウォートルスによって227×109×60.6(mm)(7.5×3.6×2(寸))に規定され、小菅の盛煉社で作られた¹⁾。煉瓦街計画は1878年に一応の完成を見た。

煉瓦街建設当時の建物は残っていないが、発掘調査などによって基礎などの遺構が発見され、煉瓦を中心とした遺物が採取された。この煉瓦のいくつかは、国立科学博物館に収蔵されている(表1・写真1)。本稿

では銀座煉瓦街で使用された実際の煉瓦を観察することによって得られた知見から、その特徴について述べる。

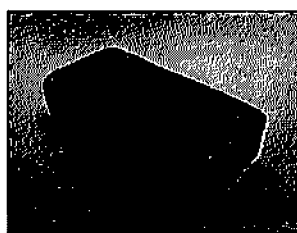


写真1 銀座煉瓦街で使用された煉瓦 (No. 11)

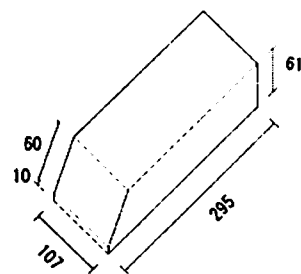


図1 銀座煉瓦街で使用された異形煉瓦 (No. 18)

表1 国立科学博物館所蔵の銀座煉瓦街使用煉瓦

No.	採取地	寸法(mm)			備考
		長	幅	高	
1	7丁目	220	110	60	*
2	8丁目(英国)	-	111	60	
3	8丁目(英国)	-	110	64	
4	8丁目(英国)	-	112	62	
5	8丁目(英国)	-	108	62	
6	8丁目(英国)	229	109	61	*
7	大通り	223	111	61	
8	大通り	231	109	60	
9	交詢社通り	229	108	58	
10	交詢社通り	225	109	56	
11	交詢社通り	219	106	58	
12		227	109	60	
13		223	108	61	
14		226	110	61	
15		227	112	60	
16		221	110	61	
17		225	105	60	
18		295	107	61	異形
19		-	111	62	異形

2. 寸法について

国立科学博物館が所蔵する銀座煉瓦街の煉瓦を表1に示す。備考欄に「*」を付していないものは「村松コレクション」中の資料であることを示し、「異形」とあるのは異形煉瓦(図1)であることを示している。

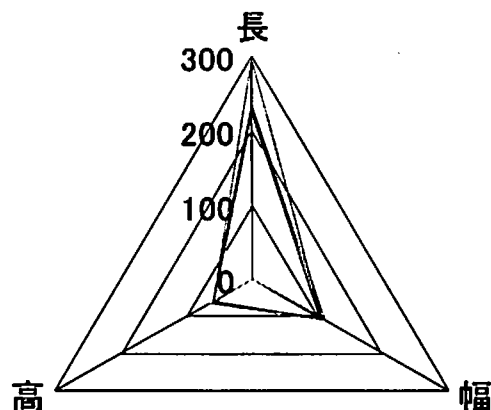


図2 煉瓦の寸法

全資料の寸法関係をレーダーチャートに示したものが図2である。資料のほとんどの寸法が225×109×60(mm)付近の値を指していることがわかる。このことから、銀座煉瓦街では規程よりも長さ方向でいくぶん小さい煉瓦も使用されていたことがわかる。長さの値が突出している1点は、No.18の異形煉瓦で計測された値である。

2. 煉瓦表面の特徴

No.12をはじめとする資料のほとんどで、煉瓦表面で最も面積の広い「ひら」面に、長手方向に向かって刷毛で掃いたような細かな線が見られた。これは煉瓦を焼く前に成形した際の「撫で板」²⁾の跡と思われ、手抜き成形された煉瓦の特徴であるといえる。

3. 色

銀座煉瓦街で使われた煉瓦の色は「黄みをおびた赤」³⁾、あるいは「みかん色」⁴⁾であると報告されている。色を文字で客観的に伝えることは不可能だが、19点の資料の大半について、おおむね同様の印象を得た。しかしながら、No.17、No.18のように、黄みの度合いが少なく、普通に想像される煉瓦色に近い色身を示すものもあり、すべてが上記の色ではなかったことがわかる。

4. 刻印

No.9には、「ひら」面に写真2のような「○」状の陰刻が見られた(写真2)。盛煉社の後身である小菅集治監製の煉瓦には桜花状の刻印が打たれることが知られているが⁵⁾、銀座煉瓦街建設当時の1872～1878年代には「○」状の刻印が用いられていたことがわかる。

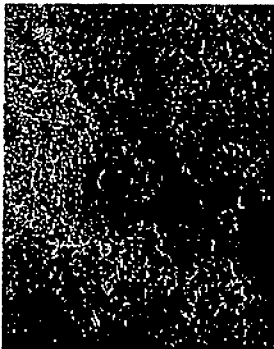


写真2 No.9に打たれた刻印

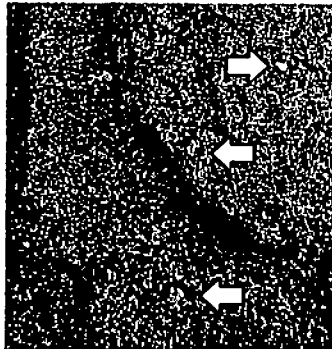


写真3 No.10の目地モルタル(矢印が貝殻)

5. 目地

残された煉瓦には目地に使われた漆喰が付着していた。製造後130年を経たこの漆喰目地は、触るとぼろぼろと崩れ落ちてしまい、後世のモルタルに比べ

て、付着力の弱いものであったことがわかる。

漆喰目地には、石灰と思われる白い硬化材の中に黒い砂粒が混ぜられていることが視認できる。また、石灰とも砂粒とも異なる大きさで、径1mm前後の白い粒がところどころに確認された(写真3)。石灰の主原料としてすりつぶされていた貝殻の断片が目地に使われていたことがわかる⁶⁾。

6. まとめ

銀座煉瓦街で使われていた煉瓦の特徴をまとめると、銀座煉瓦街では、普通煉瓦の他に台形の異形煉瓦が使われていた。普通煉瓦の寸法は225×109×60(mm)で、規程の寸法とは長さ方向で小さな物であった。煉瓦の「ひら」面には細かな線が観察でき、手抜き成形による煉瓦であることがわかる。色はおおむね黄みをおびた赤い色を呈するが、全てがそうであったわけではない。「○」状の陰刻のある煉瓦があり、煉瓦街の煉瓦を製造した盛煉社では「○」状の刻印が使われていた。目地の漆喰は付着力が弱く、目視によって黒い砂粒と貝殻粒を確認することができる。

謝辞

本稿で観察の対象として用いた煉瓦は、故村松貞次郎先生のコレクションを中心に藤森照信様・堀勇良様・大川三雄様・清水慶一様をはじめとする各位によって収集・寄贈された資料に基づいたものであることを記して感謝申し上げます。

註

- 1) 水野信太郎『日本煉瓦史の研究』法政大学出版局、1999、pp.35-37
- 2) 諸井恒平『煉瓦要説』博文館、1902(1980復刻版)、p.18
- 3) 藤森照信他『復元文明開化の銀座煉瓦街』ユース・プランニング、1994、p.6
- 4) 前掲、註1)
- 5) 前掲、註1)
- 6) 前掲、註1)、pp.250-251